

草の芽句会だより

NO,170
22,10,6

どんぐりをにぎりしめ行く城の径
通り道ザクロの熟れし園の跡

貞子

園児らの声賑やかや秋の城
城壁の修理まだまだ秋に入る

節子

虫捕りの一年生の赤帽子
十月桜雨後の二の丸まだ見えぬ

純子

師の句碑の文字堂々と秋高し
赤帽子並んで帰る城の秋

範子

煌々と老松照らす良夜かな
秋茄子の味よく染みて今朝の膳

文子

秋めきて書棚の隅の一句集
さやけしや句集一気に読みほせり

禮子

二の丸に海風届く野菊かな
蛸の遠くに鳴くはものかなし

剋子

秋晴や孫も手伝う畑仕事
柿をむく孫の笑顔のやさしさよ

芳子

出席者 川原 氏家 森 吉崎 大黒
馬場 小山
投句者 小林



今日の城山は曇り空。大手門を潜ると広場には秋の気が満ちている。色付き始めた桜の葉を見上げながら久しぶりに見返り坂を上ってみる。「この坂こんなに険しかったかしらん」「昔は駆け上がったのに」続く生駒坂は手摺りに掴まりながらである。登りきると正面に飯野山の端正な姿が待っていた。黄色く熟れた稲の穂が裾野に広がり、昔から見慣れた風景ではあるが、その都度感動を覚える。うるし林では大勢の小学生が走り回って団栗を拾っていた。おおきな声で「こんにちは」と挨拶をして拾った団栗や虫を見せてくれる。遠くの梢で蛸が鳴いている。やがて赤い帽子の一团は並んで手を振りながら賑やかに帰って行った。

宝物庫脇の萩はもう散りかけていて季節の移り変わりを感ずる。部屋への帰り道、口には出さないが、皆い句ができた余裕の気配、選句が楽しみになる。

思い返すに城歩きはもう五十年余り、私達はこの城下町に住む幸せをしみじみと想うのである。